

生 活 動 機 と 金 銭 (I)

馬 場 道 夫

経済学の教科書の最初の部分では、人間の要求が経済学の意味での需要を生み出すものであるとされている。これは恐らく明らかな疑う必要のない事実であろう。ところが具体的な生活の中での人間の要求が、いかに働き、いかなるものがあり、それがいかに需要と関係づけられるかは必ずしも明らかでない。また人間がその要求を満すために、いかなる行動をとり、その行動の動機はいかなるものであるか十分知られているとはいえない。

もちろん職場における動機や morale の問題は非常に多くの研究があり、広告や購買行動の研究調査は需要を生ずるための動機やその他の心理学的問題を取扱っている。本稿においてはこのような日常生活の中での人間の動機を巨視的な見地から問題にし、人間生活全体の広い立場から考察さをおこない、以後の研究の出発点を作ろうとするものである。経済学・経営学の場合は比較的巨視的であるといえることができるが、心理学の場合はその本来の性質から勢い微視的にならざるおえない。この心理学の立場は必要なものではあるけれども、時々全体を見誤り、正しい行動の理解・予測を失敗させることがある。

特に日常生活の動機において重要な問題は金銭の果す役割についてである。我々は働き、金をもらい、それを蓄え、使い、また働くという行動の連鎖をくりかえしている。金なしに我々の日常生活の動機は理解し得ないであろう。いずれにせよ我々心理学者は実験室や限られたグループの中での動機の研究には努力を示すが、そればかりでなくこれを特に生活の中での動機と結びつけることが必要である。我々が知りえた動機についての知識を体系化し、これを日常生活の場面にあてはめることが、本稿の試みである。そしてこのことは当然動機と経済・経営学との関係を明らかにするものであろう。

動 機 の 体 系

本能や要求の種類や分類は古くから行なわれて来た。しかしこの様な試みは単なる分類に終ったためにその学問的な意味が疑われ、最近ではその様な本能の目録を掲げることにはむしろ避けられる傾向にある。それにもかかわらずこれに類した動機のリストを掲げようとするのは、日常生活に働く動機の複雑さを考えるためであり、ここでは日常生活の中の動機、生活動機を問題にするためである。著者が先に述べた動機の基本的性質⁽¹⁾についての見解に従い、各動機を動因—行動—誘因の系列で表してみた。これは動機の性質を明確にするためである。また目録は単なる分類でなく、できるだけ多く動機と考えられるものを記することでもある。動機の性質が類似して重複する場合は因子分析や他の客観的方法⁽²⁾でそれを除くことができよう。なお Fletcher の本能のリストを参照した。

基 本 的 動 機 の リ ス ト

動 機 の 名 称	先 行 条 件	動 因	行 動 の 型	誘 因
1. 食 欲	食物の不足	空 腹 飢 餓	食べる のみこむ	食 物
2. 渴	水の不足	渴 感	水 飲	水
3. 呼 吸	酸素の不足(激しい運動など)	息苦しい	吸呼の促進など	酸 素
4. 排 せ つ	食物水の摂取	腸、ぼうこうの圧迫感など はきけ	はいせつとその場所への行動(学習性)	はいせつすること
5. 性 欲	ホルモン	性 愛		男女の行動的 身体的特徴
6. し つ と	自分の性的対象などに去られることなど、注意されなくなること	し つ と 感	闘争攻撃	概して同性で自分の性的対象などをうばおうとしているもの

(1) 馬場道夫 動機の意味と測定について 昭和36年 小樽商科大学50周年記念論文集 pp. 613—640

(2) Fletcher, R., Instinct in Man, 1957, George Allen & Unwin pp. 309~313.

7. 保 育 欲	母乳の増大(?)	乳房のぼう張感、その他	授 乳	乳 児
8. a. 活動欲	健康、休息	(健康感)?	身体的活動	スポーツなど活動すること
b. 好 奇 性	単調な作業・状態	退 屈 感	知覚・思考・社会的活動	現在とは違ったことをする
9. 休 息	作 業	疲 労 感	休 息	休 息
10. 睡 眠	覚生・疲労	ねむりたいという感じ	睡 眠	睡 眠
11. 保 温	適温から外れること	寒 又 は 暑	保温又は冷却行動	適 温
12. 接 触	皮ふの刺激をうけていなかったこと	(獲 得 性)	やわらかい物体による皮ふの接触	やわらかい物
(自己性愛)	性	〃	(masturbation) など	
13. 皮ふの保護	皮ふの強度の刺激熱・冷・痛	熱・冷・痛	それらの刺激物の除去	無刺激状態
14. 感覚による一般的快・不快	不快は強度の刺激によるに	不快感	接近(学習性)又は退避	各感覚に適した刺激
a. 皮 膚 感 覚	11,12,13に同じ			
b. 味 覚	不快な味	ま ず い	味 う・吐 く	適度の甘酸、塩など
c. 嗅 覚	不快な臭	くさいなど	か ぐ	(良い匂い)
d. 平 衡 感 覚	不安定な姿勢、運動	不 安 定 感	姿勢の保持	静 止 (スピード)
e. 聴 覚	騒音、強音	うるさい		(音楽など)
f. 視 覚	極度の明暗	く ら い まぶしい	目をとじる	(絵画など)
15. 子 性 動 機 (被 保 護)	親のいないこと保護されていないこと、危険の予期	不 安 (獲 得 性)	泣 き 保護者を求める	母親など保護者
16. 逃 避	危 険 の 予 期 危 険 攻 撃	恐 怖	(学習性) 逃 避	危険物敵の帰去、平和
17. 攻 撃	攻撃されること獲物の発見	怒 り	(学習性) 攻 撃	攻撃すること又は敵、獲物

以上はいずれも生理的身体的な基礎が認められるか、行動の様式が独特で他に区別されるものである。動因及び誘因の作用がいずれも生得的か、どちらかが生得的である。例外は子性動機で幼児、児童にとっては日常のことであるので掲げた。この外 Fletcher は家庭を作る動機を含めている。

ところが、臨床心理学的、精神分析学的、性格心理学的、社会心理学的となると、上のものに尽きない。例えば Murray⁽¹⁾ は自己卑下、達成（障害に打ち勝つことなど）、所有、同盟（友情、協同など）、攻撃、自律、社会的非難の回避、反作用的行動（最も困難な仕事を選ぶなど）、認知（探さく、好奇心など）、構成、従順、防衛、支配、他人の注意を引く自己顕示、他人に自分を示す自己表授、苦痛回避、失敗回避、保育、整備（整頓）、遊び、拒避、確保、感覚的快、性、依存、優越、理解、などを並べている。およそ動機と考えられないものもあるが、これらも二次性の動機と考えれば含められるであろう。Cronbach⁽²⁾ は愛情への要求、権威者からの是認、仲間からの是認、独立への要求、自尊への要求をあげている。Maslow⁽³⁾ では生理的要求、安全、愛と依存、尊重、自己実現、知り理解する要求である。いずれも要求とあるのは、動機とすれば際限のないあらゆる対象を述べねばならぬからである。例えば映画、音楽、家庭、コーヒー、他の色々な食物、職場、お金、友人、ある個人に対する特別な動機などで、分類困難である。また社会心理学者 Kleinberg⁽⁴⁾ によると両親的動因、攻撃、所有、自己主張、自己保存、性、有機的要求、群集が分類されている。⁽⁵⁾ Cattell の erg を示せば、性、集合、両親的保護、探さく（好奇心）、逃避、自己主張、自己性愛（超自我）、となっている。

以上の外様々なリストがあるが、述べる必要はないであろう。著者によって異なることを示すだけで十分である。ここで問題であるのは自己主張とか、自尊、集合などの明確な生理的基礎のないの社会的動機である。これについては後

(1) Murray, H. A., Exploration in Personality, 1938 Oxford University press.

(2) Cronbach, Lee.J., Educational Psychology, 1954 Harcourt, Brace pp. 100~112.

(3) Maslow, A. H., Motivation and Personality, 1954 Harper & Brothers, New York pp. 80—106.

(4) Kleinberg, O., Social Psychology, 1954, Henry Holt, New York, Chap. 4~6.

(5) Cattell, R. B., Personality and Motivation Structure and Measurement, 1957, World Book, New York, pp. 513—520.

にふれることにしよう。

これらの諸要求、諸動機が単に並列的な関係で、相互に無関係な構造で、生体の中に配置されており、ある一つの動機が強い時、他の動機が抑制又は抑圧されて行動や意識に現われない。行動や意識に表現されるのは、多くの動機の中で、その時に他のものより優勢な、強度の強いものである。ここでは要求のまにまに行動の目標を変える人間機械の姿を見ることができる。上に述べた様相は正しいであろうか。Maslow⁽¹⁾ は人間の動機はこの様に並列的なものではなく、そこには要求体系というべきものがあり、一種の階層をなしているという。彼は正常な人間を強調することにより新しい正常な人間の性格又は一般心理学を作ろうとした。この点は我々の目的と一致する。彼の人間動機の学説によると、人間の要求はまず生理的要求が満足されねばならぬとした。次いで安全の保証がされる必要があり、これが満足されれば、愛や依存の傾向が現われる。更に次に社会の中での安定、自尊心を持つことを要求する。以上の要求が総て満されれば、自己実現の要求が現われる。これは音楽家が音楽を作る様に、社会に対してよりも自分の潜存的能力を実現することの要求である。また基本的要求の満足を得るための保証がない時、例えば失職の様な場合には、その保証を求めてあたかも基本的要求が欠除したかの様に行動することをいう。以上のいずれもが満足されれば、理解し知ろうとする欲求が生ずる。これは猿やネズミの様な動物においても好奇心や探さく傾向として実験的に示されている。次には美的要求がある。従って生理的要求、飢や渴があるときには他の要求は現われない。これは他の動機に比べて強度が高いというのではなく、他の要求の現われる前提条件として生理的要求の満足があるというのである。他の要求についてもその順位に従って同様の階層が認められる。我々の日常生活では生理的要求はほぼ満足されていて、食事時間などにこれが現われるが、日常には他の要求例えば仕事への動機、他人に対して自尊心を保つ、テレビを見る動機などが支配的になっている。更に人間の要求は完全に満されることがあるという性質のものでなく、精神的に健康な人の自己実現的要求は満足によって減退されるも

(1) Maslow 前頁(3)に同じ。

のでなく更に増加し、いわば成長に対して動機づけられているといつてよい。⁽¹⁾
 また以上の基本的要求がすべて満されたとしてもなお二次性の獲得された動機が生じて来るであろう。例えば今日は日曜日で食欲もなく睡眠も十分とったし何もすることがないとしても、そんな時にこそ、何かやりたいという気持ちになるだろう。

さて生理的要求には食、飲、細かくいえば糖分、塩分、他の栄養素の欠乏がある。これがホメオスタシスといわれる生物の平衡維持作用に関係していることは度々示されることである。ここでは要求の並列的構造があり、動機は相互に独立しているであろうか。激しい空腹ならば、味などの特性、栄養的な好みは無視されることが考えられるが、必ずしも厳密にいつて階層的構造があるとはいえない。しかし生理的相互作用については明白である。低い気温でネズミを飼えば餌中に脂質のない時は炭水化物を、炭水化物のない時は脂質を多くとることによって平衡を維持する。これらの栄養学的な考察については別にのべてある。⁽²⁾寒暑はそれぞれより適温に向わせようとする動機を生じ、冷暖房、衣服の調節、時には運動や怪談を聞くなどでまぎらわされる。この例はあまりにも生活的ではあるが、生理的動機と他の動機の相互関係を示すに十分である。要するに生理的動機は、相互禁止的に又は相互補償的に働きあい、あるひとつの行動の動機となっている。

次に生理的、基本的要求が満足されれば、自分を危険から守ろうとする動機が生ずる。逆にいえば極端な飢餓の時には危険をかえりみずに食物をとりに行く行動が生ずる。危険から守られれば自分の愛情のために行動する。もちろんこの動機の重要性の順序がすべての人間にいつでも当てはまると考えることはできない。例えば特攻隊の自殺的行動は社会的要求、自尊心のために他のあらゆる基本的要求を無視した行為を行なったものであると考えられるかもしれない。このとき社会の要請に反することは死を意味するという議論も成立つが、志願した場合はなおさら他の道を選ぶということが可能であつたろう。その他

(1) Maslow, A., Deficiency Motivation and Growth Motivation, In R. Jones (Ed.)
 Nebraska Symposium on Motivation, 1955, Univ. Nebraska press, pp. 1~30.

(2) 馬場道夫 食欲と栄養 一動物の食餌行動の性質と要因一 栄養学雑誌 1959,
 17巻1号 pp. 3—12.

汚職や他の犯罪によって自殺をするのは、社会的圧力、つまり社会的動機がいかに強いものであるか示すものである。しかし正常な社会か精神的に健康な人間にあってはこの様な行動は生じないであろう。色々な点で例外は認められようが、人間の生活全般はほぼ“優性の原理”(Prepotency), そう名づけても良いと思うが、に従うことと思われる。それに加えて様々な種類の動機の間相互作用を認めねばならない。これは階層の上下にある動機についても存在する。

ところで人間の具体的な動機を考察する場合に、その具体的な誘因は実に無数なものがある。この具体的な生活動機を分類する科学的方法はないものであろうか。生理学的社会学的基準、動機の獲得の機制、因子分析などから可能である。

社会的動機の中には自己卑下、財産の所有、同盟、従順など実に多くのものが述べられてきたけれども、その分類の妥当性は特に疑問が多い。また生得的か獲得的であるかの議論も多い。しかしこれらの動機が動機であるとすれば必ず社会的に獲得された部分があるであろう。Kleinberg⁽¹⁾の優れた社会的動機の考察には次の様なものがある。彼は動機に dependability 信頼性の概念を適用した。これは動機の強度を示すものではむしろなく、どれほど基礎的であるかを示す概念である。三つの規準があり、第一は人間における特定の行動と他の生物特に類人猿の行動の連続性である。第二には動機の特定の行動の生化学的、生理的基礎の発見である。第三は人間の住むあらゆる地方、社会に存在するかどうかの普偏性についてである。この規準に対して異論もあるが、また必ずしも完全であるとはいえないが、どれだけ環境条件に左右されないかを知る一つの方法として便利なものである。絶対的な信頼性をもつものとしては、渴、飢、休息、睡眠はいせつ、一般活動、美的動機である。これらは著者の初めに述べた動機のリストにほぼ一致するが、更に保温など加えたいところだ。しかしこれらとしても環境や他の条件で、動機の表現形式や一般的制度に変化が生ずることはいうまでもない。

次に信頼性のあるものは生理的基礎を持ち、あらゆる社会に見出されるけれ

(1) Kleinberg 34頁(4)に同じ。

ども、多少の例外があり、社会によつてその表現の形が著しくかわる場合である。性、妊娠後の女性的行動、自己保存が含まれる。求愛行動の様式、結婚の形態は社会文化によって大いに異るし、夫婦の役割についても男性が労働をするとは限らないなど変化がある。妊娠後母親は子供の世話をよくする民族も多いが、逆に全く子供を捨ててかえりみない人もあるし、できるだけ早く子供を離そうとする民族もある。自己保存は一つの動機ではなく、渴や食欲、他の自己の生命の維持に役立つすべてが入れられている。これらが一つの動機の型をなし、これらがまとまって個体の存続を維持する動機を作っているという考えである。この様な概念が果たして通用できるかどうか疑わしいけれども、さきにのべた愛国的自己犠牲行為や他の自殺行為をみる時に一つのヒントが与えられるだろう。自己犠牲的行為は日本人ばかりでなく、キリスト教の多くの殉教者にもあり、メラネシアン、ポリネアシンなどの民族には白人の侵人に際して、もはや生きようとはしなかったものも多い。ここには後に述べる自尊的傾向、群居性の動機がある。

第三は間接的に生理的な基礎を持つが、人間の多数の社会において生ずる動機である。これは逃走、自己主張、攻撃である。逃走、攻撃はそれぞれ恐怖、怒りの生理的基礎より間接的に表現される。間接的というのは、恐怖があっても常に逃走や攻撃があるとはかぎらないためである。特に戦争は社会的事件であり、一つの事業である。怒りが生得的であるからといって、戦争を不可避にすることは少々飛躍が多すぎるであろう。特に問題のあるのは自己主張である。自己主張が動物界でみられるのはむしろ普通のことであり、猿のボスになるための闘争、階級性はよく我国でも研究されていることである。またその他の群居性の動物、馬、鳥などでよく知られている。群居性から必然的に優位、競走、自己顕示、自己表現、支配、これらに対する従順、社会的非難の回避、自己卑下などの諸概念がこのカテゴリーから生まれて来なければならぬ。経験を通じて名誉、誇、恥などの感情も形成される。社会的動機の解明にはこれらの動機がいかなる構造をもち、いかに発達して来るかが一つの重要な論点である。これについては再び後に検討しよう。

第四は生理的な基礎はないが、多くの社会に現われるものであり、ほぼ目的

に対する手段として元来役立っていたものである。群居性、父性的動機、妊娠前の母性的動機、子性動機、所有、自己従順である。これらの動機の存在しない社会のあることから、これらが獲得されたものであることが考えられる。特に興味のあるのは所有、群居の動機である。原始共産制といわれる様に未開民族には共有財産制を見出すことができるが、これがすべてでない。一つの岩一つの水たまりにも所有者のある民族から、全くの共産体制、共通財産のみを持っているものまで様々であるが、自分の力で獲得したものは自分のものになり集団で獲得したものは集団のものになることが多い。そして単に必要なために獲得するばかりではなく、時には自分の社会的優位を示す手段として、必要以上の羊の群を持ったり、倉の入口をあけておき、わざわざ穀物を顕示して社会的優位を保つなど様々な例が示されている。これは大して必要もないのに電気冷蔵庫を買ったり、あまり役に立たぬ自動車を買う人々に似ている。

獲得されるのはいわゆる社会的動機、グループの中で形成される動機ばかりでなく、特定の食物に対する動機などもそうである。例えばコーヒーとかビールなどはそうであろう。この外日常の食品や多くの商品に対する欲求は、手段のために必要とされるものもあるが、多くそのもの自体を要求する動機となり獲得動機となる。基本的動機は一次性動機というに対して獲得性のものは二次性動機ということは周知のことであるが、具体的な生活動機において大部分は二次性のものとなっている。この様な獲得性の動機については種々な論義がされているけれども、ほぼ次の図式が承認されるものであろう。子供は母親によって乳を与えられる。満足又は快の経験をする。危険があれば防がれる。危険不安の原因は除かれる。更に皮ふの直接の接触は快をもたらすのであろう。また排便、排尿にともなって生ずる不快感を取り除いてくれる。これらは集合して母親に対する依存傾向や愛情を作り出すであろう。表現を変えれば本来手段であったものが目的となる。手段であった母親は機能的に独立して母親そのものが求められる様になる。この最後の表現は Allport⁽¹⁾ によって機能的自律といわれたものである。また上の解釈の学習心理学的研究は Miller, N. E. によ

(1) Allport, G. W., Personality, 1937. Henry Holt & Co. New York

て行なわれている。⁽¹⁾最も簡単にいえば本来中性的あつた母親という刺激が、快に何回もともなわれて、快という性質を条件づけられたといふことができる。母親をみるとそれだけで安心し、笑い、眠ってしまう幼児の行動はこれを示してあまりある。生みの親より育ての親という言葉はこの意味で正しい。同様に条件づけの過程は具体的な商品に対する動機に用いられるだろう。食品は生理的的基本要求によって求められるとされるけれども、加工された食品や、タバコの様なし好品、一度も食べたことのない食物は、はじめから求められるものではない。食べてみた結果、味ってみた結果害がないことが解れば、かつ美味であるという快の経験がともなえば、快が条件づけられて誘因として働く様になり、空腹に際してその食品が快と共に想起され求められるのである。もし繰り返かえして不快の経験をともなえば、その食品は忌避されることはまちがいない。この様な説明に対して、恐怖の動因に較べて快の動機の獲得は動物では長期間持続しないといふことがいわれている。実験的にも多くの事が示されている。しかし快の動機の獲得は元来が手段——目的関係にあったために断えず強化をうけることになる。時には部分強化になるが、この条件は更にこの条件づけを長持ちさせるものである。この意味で人間の獲得動機が快のものであっても永続するには何も不思議はない。

社会の中で生活することは、社会的な動機を作る事である。ある人は社会から離れ、独居を好む様になるかもしれぬし、他の人は、社会の中で協同して生活することに喜びを見出すかもしれぬし、更に別な人は社会の中で常に優位に立ち、支配せねば気のすまぬ人もでて来ることであろう。個体の能力、特性とこれらに対するその個人の属する社会の能力、特性の一般的水準との関係から規定されて、その様な社会的動機が形成されるであろう。これらについて細かい説明を加える余裕はないが、一例のみを述べよう。遊びをするのは児童の特徴であるが、集団で遊びできるのは4・5才頃からである。集団ができれば、優者と劣者が生ずる。運動能力に優れるものは勝ち、優位の快を得るであろう。敗者は失敗又は逃避の不快を条件づけられる。競走することは勝つ者にとって

(1) Miller, N. E., Learnable Drives and Rewards, In S. S., Stevens (Ed.), Handbook of Experimental Psychology, John Wiley, 1951, Chap. 13.

は容易に楽しい事になり、負ける者には不快なことになる。またグループに属さない者や遊び友達のない環境で育った者は全く異った動機をもって成長するであろう。敗者は独居を好む様になり群居性の動機は少なくなるだろうが、勝者又は適応者は群居性の動機を持ち、協力に興味を持つであろう。

この分析を更にすすめれば性格心理学の問題になる。古くは Adler の劣等感や精神分析学における Cathexis⁽¹⁾ などがあり、最近でも幼児期の経験と成人における行動の関係は更に科学的な興味をもって追究されている。McClelland, Atkinson⁽²⁾ らの幼児期における賞罰と成長後の行動など様々な問題が指適されるであろうが、これらは動機の問題であると共に、動機が性格の中に固定された態度の問題になり、複雑な性格形成の学説的問題点である。我々の目標はむしろ一般的な獲得動機の形成を明らかにすることにある。興味のある問題ではあるが別の機会にゆずろう。

さて獲得されたと考えられる二次性動機をいかに分類するのが正しいのであろうか。生理的基礎によって分類できるものは、既に最初に表示した動機のリストの中に含まれている。音楽や芸術に対する動機、特定の食品に対する動機、攻撃や逃避についてはもちろん生理的分類ができる。しかし社会的動機はこれを行なうことができない。競走、自己主張、群居性などの動機が存在したとしても、何を根拠にしてその分類が可能なのであろう。生理的分類は不適當である。それらの社会的動機は社会の存在によって生じたものである。ここで社会環境について分類することが可能であろう。しかし人は皆個人個人環境が異なる。環境について分類することはそれから生じた動機の差異をみることになる。社会全体からみれば結局性格や態度の問題なる。ここで最も必要なことは社会的動機の因子分析を行なうことである。この方法によって科学的分類をすることができる。人間の具体的行動について因子分析を行なうことは困難であるため、質問紙法によって個人の動機の一般的傾向つまり態度から推定するよりほかはない。

(1) Toman, W., An Introduction to Psychoanalytic Theory of Motivation, 1960, Pergamon press.

(2) Atkinson, J. W., (Ed.), Motives in Fantasy, Action, and Society, 1958, D. Van Nostrand, pp. 485—494.

そこで Cattell⁽¹⁾ による因子分析の結果をみよう。基本的動機を合わせて述べてみる。

性エルグ

私は美しい女性と愛しあうことを欲する。この他喫煙，飲酒。食事。音楽。旅行。など。

群居性

スポーツ，運動。人々と自由な時間をすごしたい。職場の仲間。室内の社交的ゲーム。スポーツを見る，語る。個人的な遊びを嫌う。権威との不一致を望まない。狩，魚釣り。社会性の多いクラブ。映画，演劇。

両親保護性

苦痛を助ける。自分の子供の最善の教育。自分の両親の快適な生活。自分の妻に不必要な労働をさせぬ。事故による危険，病気の救われることを見る。故郷での自分の気に合った生活。両親の援助や忠告をのぞまぬ。など。

探索（好奇心）

本などを読む。音楽。科学。好奇心。絵画，彫刻。機械，電気器具。映画，演劇。など。

逃避

原爆の恐怖。敵の軍事力の破壊。事故による死の危険と病気の救助。など。

自己主張

自分の外見が賞嘆の的になる様な服装をしたい。自分の給与を増すこと。自分の仕事で一流であること。クラブに属する。良い評判を保つ。仕事での利益。政治的論議自尊心を保つ。自分の持物を保つ。自分だけで自由に過ごす。

超自我（自己性愛）

喫煙，食酒。自分の会社。思考，空想。食物類。休息。朝寝。服装。自分の性欲の満足。自分の国に対する興味なし。自尊心，他人の評価を気にせぬ。

精神分析学的見地からは食事，喫煙，食酒などが性，自己性愛に含まれることは興味深いことである。日本ではタバコの広告と休息が結びつけられている

(1) Cattell, 34頁(5)に同じ。

のをよくみるが、性との結合も効果的であろう。探索については、我々の動機のリストの好奇心と一致している。逃避についても同様である。

両親保護性は単なる生理的なものでなく、社会的な動機を含んでいる。独立への要求の仮定を暗示している。青年期においてこの傾向が一般に認められるから、成熟から生ずる生理的条件からこの動機が発生するのもかもしれない。社会的動機について特に注目すべきことは群居性と自己主張である。Maslow, Kleinberg などによって繰返し主張されている。この動機が存在には疑いがないであろう。我々の立場からいって、群居性の中にスポーツの項目のあることは重要である。児童期の社会性を決定するものの主要因として運動能力があるからであり、運動能力のあることはグループの中での成功感をもたらすことが多いであろう。群居性では他人との協調に重点がおかれるのに対して、自己主張は他人に注意されることを望みながら、他人との協調が多く含まれず、自分が他人より優れることに関係している。同じ利己的側面を持ちながら、超自我と異なるのはこの点であろう。そこで自己主張は社会生活を通じて獲得されたものという推理をすることができる。これは幼児期、児童期の社会生活における失敗者が優位への要求を持つ様になったことを考えさせる。これは劣等感の概念や、Dollard⁽¹⁾ らの欲求不満—攻撃性—仮説を想起させる。しかし劣位者の苦痛が、他のもう一つの社会的状態、優位に向うのは単に回避反応のもう一つの型であるかもしれぬ。

動機の体系化について、まず並列的關係において動機のリストが提出されたが、我々はここで少なくとも次のものを加えねばならぬであろう。

18. 群 居 性	社会生活での適応 仲間のいないこと	(さみしい)	社交的行動	友人、仲間
19. 自 己 主 張	劣 位	不 満	競走的行動	社会的優位
20. 独 立 (自分の家庭 を作つたなど) (両親保護性)	成 熟 他人の世話にな ること		家庭を作るな ど 他人の世話	家 庭 被 保 護 者
動 因 の 名 称	先 行 条 件	動 因	行 動 の 型	誘 因

(1) Dollard, J., et al, Frustration and Aggression 1939, Yale Univ. Press.

これからの研究の方向として、まず動機の生理的、行動的基礎においてその構造を把握し、各動機の相互の関係、上下関係を定めることが必要である。それらを生活史を含めての環境について分類し、動機の発達と獲得の過程を理解することである。単純に言えば環境条例を一方の軸におき、生理的構造を他の軸におき、その両者の交叉、相互作用として動機が表現される様に整理し、その分析のために又はその実証のために調査し、実験することが必要である。この結論は極めて注目すべきものと思う。

生活行動の連鎖と生活動機

初めに述べた様に動物、人間の生活は欠乏、要求、活動、行動、誘因、満足、欠乏……の循環連鎖をなしていると見ることができる。この生活行動の連鎖がいかにより、いかなる変化が有機体の中に生じているかを捕えようとするのが、具体的な生活動機の様相を知る上において欠くべからざることである。行動の予測という観点からすれば内省的考察は必ずしも必要ではない。行動の客観的科学の立場から論を進めよう。さらに前章が動機を構造的むしろ静的にとらえたのに対し、本章ではこれを系列的、動的に研究しようとするものである。ここでは動機の種類を問わず一つのものとしてみる。

動物や人間の新生児においてはほとんど行動というべきものがなく反射である。空腹やその他不快に際しては泣くことが生じ、これを目当てに母親は乳を与える。動物の場合は自発的なランダムな活動が生じ、おそらく母親の体温などに対する誘因的行動の後、乳首を発見し、反射的な吸乳反応と乳もみ行動が生ずる。誕生当初はこの単純な行動連鎖の繰返しであろうが、次第に母親と各種の快との結合が成立し、母親を求める行動、子性動機が成立する。身体的成熟発達と共に活動の範囲が増大して来る。活動の種類、従ってまた動機の種類も分化され数も多くなり複雑となって来る。

成長した動物における生活行動連鎖は次の様なものであろう。このとき動機は純粹に生得的なままのものではありえない。例えば空腹は食物との連合なしには生じないであろう。空腹は食物の探求行動を生ずる。食物の存在する場所が学習されていなければ、ランダムな活動が生ずるであろう。しかし通常の生

活の場面では食物を食べた経験がないことは考えられないから、必ず以前食物を食べた場所への行動が生ずるであろう。もちろん全く新しい実験場面に突然入れられたときはこの限りではない。食物への行動が生じている時は、人間でいえば、食物の形、色、匂いが想起されている状態になる。つまりこれらに対する反応のいき値が下っている。弱い刺激に対しても早く多くの反応が生ずる状態にある。⁽¹⁾かくして食物の発見は容易になり、早く目的を達するという合目的な結果を自動的に非合目的に招くことになる。しかしここで敵が現われたり、目標が動物であって逃げ出したり、川などの障害があって目標への直接の道が断たれるとする。敵の場合には相手が自分より強いという学習があれば逃走が、弱ければ攻撃が生ずる。この間別の動機型式に支配される。逃走の間自分の目標が敵に奪われれば、もう一度初めからやりなおさねばならぬ。目標が逃げ出すときは追跡などの別の攻撃が生ずる。攻撃は怒りを生理的基礎とするというけれども、餌を追いかける動物は怒りの生理的状态にあるだろうか。人間の狩人も獲物に対して怒っているとは考えられない。攻撃は行動の形式であって常に怒りを表現するものではない。攻撃そのものが要求されるのは獲得動機となったときのみであろう。さて本論にもどり、獲物を追いかける行動はむしろ快をとまなう様になるだろう。目標との間に障害のある時は迂回などの問題解決の場面となる。いずれの場合でも誘因を求め続ける反応量は動機の強さを表わし、動因の強さ、餌の量及び質、敵の強さなどによって規定されてくる。更に競走相手が現われれば、これも学習の結果、激しい動機がこれに加えられる、激しい反応が生じ、一刻も早く餌をとろうとする活動となるであろう(競走的動機)。餌に達して快の経験又は強化、満足をえて一連の生活行動系列は終る。社会生活、群居中の動物の行動系列は支配、従属、群居による相互補助、協力の関係で更に複雑にされるが、基本的な線は壊れないであろう。

さて人間の社会生活における生活行動連鎖はこれに何か加うべきものがあるであろうか。ほとんど加うべきものがない様に見えるのは皮肉なことである。言語とか複雑な社会体制、習慣、連鎖の長くなることなどはあるがその基本線は消えない様に見える。しかし現代の大部分の人間社会において動物と非常に

(1) 馬場道夫、動機づけと学習 昭和31年東京教育大学修士論文。

異なる一つの重大な点がある。それこそが通貨、貨幣、賃金、要するにお金である。勤労者の生活動機はまず第一段階として貨幣の形での報酬、賃金をもらうまでと、第二段階としてそれをいかに使うかという二つの部分に分けることができる。それらに対して第三の行動連鎖、あまり貨幣に関係のない、貨幣によって求められず、貨幣を対象としない生活動機が考えられる。これは自己の金銭的利益に反したり、金銭に関係のない社交的行動、愛情、娯楽、グループによる社会的圧力、休息などである。

仕事の動機

言うまでもなくモラルがその主要な研究分野である。しかしモラルの概念はあまり明確なものではない。⁽¹⁾ Viteles の引用によると、

Morale は特定のグループ又は組織体の目標に満足し、それを続けることを望み、それに対して努力しようとする意志の態度である。

モラル調査の因子分析の結果は十分なものではないが次の様なものである。⁽²⁾

- (1) 自分の報酬、(2) 直接的な監督、(3) 会社の運営について、(4) 作業の精神物理的条件、(5) 作業の満足、(6) 業務の関係、(7) 組織体への統合

誠に多様多様であって何故にモラルという概念の下に一括されねばならぬか理解に苦しむ。日本語で一語で表わせれば志気であろうか。会社に対して不満もなく、仲間同志に争いもなく、皆楽しんで仕事をしている各人の状態を意味すると思われる。従ってモラルが低いからといって作業能率が下がるとは限らない。例えば生活水準の低い貧困な労働者を低賃金で庸う場合。またモラルが高いからといって生産能率が上がるとは限らない。(あまり楽しみすぎて作業に熱中しない場合。)

ここではその様な従来の概念にとらわれずに前述の動機体系から作業を考えてみたい。先ず作業の動機は何かということである。(第1)の要因として仕事の内容そのものに興味を持ち動機づけられている場合であろう。昔の職人気質といったものがそれであろう。賃金はもらわなくては困るがそれだけではな

(1) Viteles, M. S., Motivation and Morale in Industry, 1935, Norton, New York, pp. 12.

(2) 同 上 pp. 288.

い。これは活動欲、構成、手足の活動、好奇心などに関係しているものと思われる。(第2)の推定は仕事を通じての色々な楽しみ、特に社交的關係から生ずる快である。群居性の動機から考えられる。(第3)は自己主張であって他人より優れようとする個人的、對他人的動機である。(第4)は最も重要な賃金である。これは消費を通じてあらゆる生理的、社会的動機の目標、誘因の達成を可能にする。またそれらの快より生じた獲得性の動機である。(第5)はモラルの因子分析の結果明らかになった精神物理的環境である。著者の動機のリストの感覚による一般的快、不快である。この条件の悪いことは作業場の不快を意味し、これは作業そのものに不快感を条件づける。従って出勤率の低下、早退、遅刻の増加をとまなうであろう。もちろん作業場の極度の不適合性、照明の暗い事、気温の高いこと、危険性は作業に直接影響することはいうまでもない。しかしこれは作業を困難にすることによって作業の動機を減退させるであろう。この意味で第1の要因、活動欲、好奇心の低下を意味する。従来のモラルの概念は第2の要因に最も近いと思われる。この外(第6)の要因として以上のすべての作業動機の集合した結果から生ずる仕事の満足が作業そのものに条件づけられ、作業することそのものが快となる獲得性の作業動機が考えられる。この外の生理的要求や独立への動機、家庭を作ること、自分で自分の仕事をしたいなど考えられるが、大部分は貨幣を通じて満足されるであろう。

先ず第1の要因は職業適性の問題に関係している。従前より単純な作業ではあまり知能の高い者もあまり低いものも仕事に適応できずに離職率が高いことがいわれている。⁽¹⁾この他様々な仕事の適性が特に能力について考えられる。また新しい産業革新による各種のオートメーション化、特にベルトコンベアシステムは作業を単純化して、興味のないものにする。作業そのものによる快は著しく減退したのであろう。個人の能力は無視されがちであって、容易に他の人と自分を置き換えることができる。これは個人の独立への動機を同時に弱める。コンベアシステムでは自分の能率をあまり落すことはできないが、欠勤、転職

(1) Ghiselli, E. E., & Brown, C. W., *Personnel and Industrial Psychology*, 1948, McGraw-Hill, New York.

などを増加させるであろう。

第2は群居性である。現代の経営学や産業心理学では働くのは金のためばかりではないということが繰返し主張されている。その主な原因として群居性、いわゆる人間関係の問題がいわれる。特に印象的であったのは K. Lewin 一派による研究であり、ソシオメトリーの適用である。更にグループの norm の問題、会社との同一視又は一体化の重要視がある。これは主として労働者、実際には組合の代表の経営参加、Scanlon プランでは更に作業に関するアイデアの労働者による積極的提供によって遂行される。かくしてモラルも高まり、生産性も増し、労働者の賃金も増加するという。奨励賃金制 (Incentive system) における労働者の反応は極めて具体的に Whyte⁽¹⁾ らによって書かれている。労働者のグループ内で決められた1日の仕事の量、それ以上やるとグループの他の人から非難される。計時員 (time-study-man) に対するごまかしの工夫の色々。その達人に対する英雄視……などである。そしてこの様なグループの規約や圧力に対して超然として自分の出来るだけをするタイプの人間のいることをも示している。彼等は農村出身で比較的近所に仲間の友達が少なく、Gang つまり小学校学年から生ずるがき大将のいる様な凝集性の高い集団に属することがなかった。このためグループへの協調がかけ、群居性の動機が十分発達していなかったと考えられる (自己性愛の発達があるかもしれない)。逆に都会出の人々はこの Gang に属することが多く、グループの規約に従うことに慣れており、群居性の動機をよく獲得している。経営参加によってこの様な労働者のむしろ反抗的態度は改善され、いわゆる両者の一体感によって労働の生産性が増加する。しかしこの生産性向上は我々の場合第3の要因自己主張から説明される。

第3の要因、労働者のグループ内にも労働者相互の競走関係があると思われる。また社員と経営者には従属—支配の関係が生れるであろう。更に経営者は経営者同志が競走の関係にあり、経営の最大利益の法則を外れてまで競走する。その上に社会には階層が分化し、上層者は下層者を見下す関係になる。こ

(1) Whyte, W. F., et al, Money and Motivation, an Analysis of Incentives in Industry, 1955, Harper, New York.

の様に社会全体は一つの大きなグループである。

問題を経営者と労働者に限ってみる。経営者は支配的地位にある。かくして新しい賃金制度を工場にもちこむことができる。会社の決定は労働基準法に反しない限り、従わなければならない。労働者が経営者の経営内容がわからないときには、労働者は自分達が利潤の正当な分配を受けているかどうかについて常に疑問を持つだろう。この様にして経営者は次第に不快と結びつけられ、それが単なる不快でなく、労働者に対する攻撃、搾取、支配を意味する様になれば、労働者は自分を防衛する行動をとるであろう。そしてあまりに経営者の圧力の強い時、又は労働者の力の強い時に、経営者に対する攻撃となって現われる。具体的にはまず生産水準の低下となって現われる。この口実は賃金水準の維持、水増し雇用による失業防止策などである。しかし真の意味は経営者に対する不満の表明ではないか。最後にはストライキになる。これは明白な攻撃の意味を持つ。先の労働者のごまかしの英雄は個人的な形での経営者に対する攻撃を意味している。これは労働者の自己主張である。これが経営参加という形で改善されるのは最も解り易くいえば労働者の自尊心の回復を意味するからである。経営者の圧力による労働の提進と労働者の動機の関係は Haire によって巧みに図示されている⁽¹⁾。

経営参加によって相互不信がとり除かれることは確かに有りえた。しかしすべての場合にそうであろうか。一般に階級闘争という様になればその範囲で落着く事は考えられない。下層は常に上層に登ろうとする努力つまり自己主張の動機を持つことが多い。この努力を全々なくしてしまうことは人間を奴隷にすること、つまり動物にすることである。この意味で労働者の不満は単に一会社だけの問題では済まされないだろう。この解決に Scanlon プランをあてはめれば、労働者を会社の経営ばかりでなく、国家の経営にも参加させようということになるであろう。経営参加は単に意見の述べあいだけでなく、会社の経営の向上に役立つ真の闘論でなければならない。国家の運営にその様な参加がなされるならば階級闘争も解決されるだろう。国家の進歩を真に目ざしたものがそこに生まれているであろう。かくすれば我国は一体となって自己の繁栄に努力する

(1) Haire, M., Psychology in Management, 1956, Mc Graw-Hill., pp. 139~148.

ことができる。全世界的規模において同じことが言えると思うのだが。そしてこの自己主張の問題は単に金銭の問題ではない。

第4の要因、金銭のための動機、Cattellの自己主張の質問項目の中に自分の給料を上げることが望むというものが含まれていた。金銭は明らかに自己主張の手段としても用いられる。と同時に飲酒、タバコ、食事、映画、旅行などのために、性や自己性愛の動機の遂行の手段として用いられるし、スポーツのための費用などで群居性、家庭のために保護性の動機、科学や機械のための探索動機（好奇心）などほとんどすべての動機を含んでしまうだろう。現代の文明社会では金なしに生きて行けない。これは証明されていないとしても疑うことはできない。もし人が働く以外に金の入る道がなければ、その人は先ず金のために働くであろう。また給料を払わない会社で、他に職があるのに、いつまでも働く人がいるだろうか。先の“人は金だけのために働くのではないという”議論は正しいけれども、金なしには働けない。ラモール調査などで必ずしも賃金が第一位に来ないのはその要求が比較的満足されている時には、他の動機が現われるという“優性の原理”に一致するためであろう。例えば賃金よりも安全（失職に対する保証）や独立が望まれる。基本的欲求が満足される程の賃金が与えられれば、次の欲求が生じて来る。しかもなお基本的には賃金への動機、高賃金に対する要求は存在していると考えねばならない。また職業の保証、失職しないことに対する要求も、収入に対する保証、つまり金銭に対する動機の間接的表現である。

日本のいわゆる内職の賃金制度は単純出来高制となっている。非常に安いが基本的要求が満足されていないために、労働者の作業能率は悪くはないであろう。従来の経営者にあった人間についての単純な仮説は“人間は金のために最大の利益をうる様に働く”というのであった。皮肉なことに賃金の低いところではこれが成立している様に思われてならない。

とにかく人間は疑いもなく金のために働いている。職がなくても何としても働くというのがほとんどの人間の姿であろう。この点で人間も動物とは大して変わらぬであろう。ネズミの実験では誘因つまり餌の量 W と、餌に対して走る

(1) 46頁(1)に同じ。pp. 381~382. pp. 291~301.

走行速度としての反応傾向 sE_R は次の関係が見出されている。⁽¹⁾

$$sE_R = 5.1 (1 - 10^{-120\sqrt{w+1}}) - 1.14 \quad (1)$$

誘因のみの関数に単純化して表わせば、

$$K = 1 - 10^{-av\sqrt{w}} \quad (2)$$

ここで K は、誘因性の動機の強さを表わしている。各係数が人間に一致するとは思われないが、人間の賃金額とそれに対する動機には似た様な関係が見出されないだろうか。たとえ具体的にこの関係が証明され難いものであっても、上の関数に近いものを持つであろう。しかもこれは実証不能というのでもない。今理想場面を考える。他の条件が全く一定で、基本的要求が高く、少量の報酬に満足しない労働者があり、他の複雑な動機が介入しないとすれば、誘因の量と労働の能率は次の関係がある。

$$Y_1 = a (1 - e^{-i\sqrt{x}}) + c \quad (3)$$

更に Y_1 は単純に生産額で表わされるとする。 x は報酬の量である。

今賃金を Y_2 とし

$$Y_2 = x \quad (4)$$

と仮定すれば、(3)から(4)を減ずれば、

$$Y_3 = Y_1 - Y_2 = a (1 - e^{-i\sqrt{x}}) + c - x$$

$$Y_3' = \frac{ia}{2\sqrt{x}} e^{-i\sqrt{x}} - 1$$

$Y_3' = 0$ のときの x は最高の生産性を示す労働賃金となる。ここで労働の生産性と賃金の関係について困難な議論をする積りはなく、生産性における心理的要因の役割を明示したいためである。

この公式はともかくとして、賃金は今日に考えられる以上に重要な役割を果たしているであろう。上記の誘因に関する関数は Hull の学習理論⁽²⁾から得られたものであるが、彼によれば反応ポテンシャル sE_R (人間では能率)。

$$sE_R = H \times D \times K \times V \times J - I$$

で示される。 H は習慣、 D は動因、 K は誘因、 V は刺激強度、 J は強化(報酬)

(1) Hull, C. I., Essentials of Behavior, 1951, Yale Univ. Press, New Haven, (pp. 50~51)

の時間的遅れである。この関数型については Spence などに異論があるが、これを利用できるとすれば、人間では D は家庭における生活水準を示し、K は賃金水準、H はそれまでの作業経験から生じた学習を意味する。J は報酬の遅れで、給料の支払の遅れ、V は比較的關係がない。この他禁止要因として -I を加えることができる。この様な研究方向は人間においても必要ではないだろうか。

第5の精神物理的要因は動機要因として考えられると同時に人間工学の問題でもある。これは獲得された形にならなければ動機としては作用しないであろう。職場における不快の状態と作業そのものが結びつけられる必要がある。同様の方法で第二の要因、群居性が問題になる時がある。例えば大工場で一室に非常に多くの人々が作業するとき、個人相互の社会的關係が薄くなることが考えられる。このため群居性、社交性の動機が減少して、職場に来る喜びが一つ減ることになる。この様な例は労働者の小数グループで働くことを好む傾向、⁽¹⁾ また大きな事務室から小さな小人数の室へかえることによって、欠勤、転職、⁽²⁾ 誤が減少したなどがある。

経営の動機

経営者の事業動機である。実証的研究は少ないが様々な角度から分析が行なわれている。⁽³⁾ Katona は経済心理学つまり経済的行動の心理学的分析において考察を行なっている。経営者はその事業における何らかの決定を下す場合に消費者と異った様式で行なうとは考えられないが、より慎重であり、計算高いであろうと意見を述べている。つまりそれだけ最高の利益をあげようとする方法をとるということである。しかもなお、消費者と同様に安全とか權威を、自己の個人的利益よりも事業の発達を、そして社会的優位を望むという。これは第3の要因、自己主張の動機に外ならない。アメリカの場合会社の所有者と管理者とは判然と区別があり、会社の利益は管理者のみのものにならず、多くの株主に別けられることになる。会社の利益をあげるのは直接管理者の利益にな

(1) 46頁(1)に同じ。pp. 139.

(2) 49頁(1)に同じ。pp. 28.

(3) Katona, G., Psychological Analysis of Economic Behavior, 1951, Mc Graw-Hill.

らない。しかし管理者と事業との一体化が会社の利益、発達を促すという。もちろん会社の利益、発展は自己の安全、より多い収入、権力の強化をもたらす。更に市場において競走者である他の会社より優ること、支配することが経営者の動機となるだろう。これらも自己実現の動機であろう。我々の立場では一体化ということは自分の管理業務と自分の利益が結びつけられ、永い経験によって獲得されることと云ってよいであろう。会社の業務が著しく自分の利益に一致しないなら一体化は生じないであろう。会社の利益を自分の利益と思う様になるのは、管理業務が獲得性の動機に支配される様になつたためである。

会社が破産寸前となれば無駄な出費ははぶかれて、最大の利益を追求することになる。ここでもまた“優性の原理”が証明される。

更に広範囲の考察は Lauterbach⁽¹⁾ によってなされている。事業活動の動機づけ、事業はいかになされるか、社会経済的不安定と個人的不安感、経済改革と人間の精神の四部からなっている。再び我々は競走における自己主張を見出す。特に印象づけられるのはアメリカの企業が自由競走を最高の信条としてゐることであり、政府の介入を極度にいやがることである。例えば T.V.A. の様なものでなかなか受け入れられなかったという。これもアメリカにおける企業の自己主張性と関連がある様に見える。これに対して我国では断えず政府の保護を求める傾向があるのではないか。これは企業の政府に対する子性的動機、態度を示し、政府がまた保護的態度を持つこと期待している。政府はこのとき父性的動機又は両親保護性の動機をもって行動しなければならない。

またアメリカにおいては事業家の地位は極めて高く、その地位に達することは最高の成功を意味するのに、ヨーロッパでは政府高官、貴族、科学、芸術の職にあることに価値があるとされている。社会による価値の差違はその国の生活動機を知る上に重要なことである。我国の如く封建的伝統の強い社会では、また全体主義国家では、いかなる価値が認められているであろうか。またいかなる社会的生活動機が優勢であろうか。大きな研究題目である。恐らく我国に

(1) Lauterbach, A., Man, Motive, and Money, psychological frontiers of economics, (Second edition), 1959, Cornell Univ.

における価値はヨーロッパとアメリカの中間、生活動機は自己主張と共に群居性の動機が、それに恐らく子性動機の発達がみられるであろう。全体主義国家では国家権力に最高の価値が与えられるであろう。

Katona と同様に、事業をすることは最大の利益をあげることのみではないことが指適され、仕事の達成の認知、地位の高さ、監督の自律性、などがあるという。優位、競走については Katona と一致している。また第1部の最後の部分では事業家の自己主張が攻撃性と結びつけられて解釈されている。以上は自己主張を中心に Lauterbach の論を検討したのであるが、彼の分析の特徴として精神分析的説明をあげることができる。これを更に進めれば企業における病態心理学となるであろう。興味のあることではあるが、本稿の範囲を越えるであろう。

生活動機には職場を持たない家庭の主婦や他の人々、特に独立と依存の中途半ばな状態にある学生、生徒、職場にある女性特有の生活動機など考えられねばならない。これらについても同様の分析方法が可能である。これらを具体的かつ科学的に研究しておくことは産業心理学における貢献と共に、具体的な生活指導、カウンセリングに役立つであろう。事実ばかりでなく理論においても多くの貢献が出来ねばならない。

残された問題は、第二の連鎖、いかに、何のために貨幣を使用するかである。また第三の連鎖、貨幣とあまり関係のない生活行動が残されている。しかしこの第三の連鎖については実は度々ふれている。すべての人間がいつでも金のためばかりに仿っているのではないという主張は何度も繰返されている。群居性の動機、自己主張、は金銭を獲得するという方向をとることもあるが、逆にグループに対する協力、社会的な競走、権力という形となり、自己の収入を減らしたり、問題にしなかったりする。両親の保護性の動機、支配者に対する反抗、攻撃も第三種の生活行動の動機である。この行動については消費の動機について再び触れられるであろう。

結局労働の行動系列における生活動機は、ほぼ動機の体系によって説明されまた動機の分類、理論が実証されていることが明らかとなつた。生活動機は人間において非常に複雑なものであり、動物とは多くの点で異ったものがある。

た。しかしなおも動物行動の研究は人間行動の理解を一層深いものにしたであろう。しかもなお動物行動にみられた生活行動系列の要路は守られているであろう。生活行動の中には動機と動機の複雑な相互作用がある。従って今後は動機の分析的解明ばかりでなく、二つ以上の動機の相互作用、いかに組合わせたか、いかなる動機が生ずるかの研究が必要である。各動機因子の再構成の研究へと向わねばならない。

(未完)